

千代次の驚き

豊島与志雄

青空文庫

お父さん、御免なさい。あたし、死ぬつもりなんかちつともありませんでした。ただ、びつくりしたんです。ほんとに、心の底まで、びつくりしました。

村尾さんが、まさか……。今になつても、まだ、腑におちません。随分前からのお馴染で、きだて氣質もよく分つてるつもりでしたのに……。少し変だと思つたのは、つい近頃のことと、それも、実は、あたしの方が変だつたのかも知れません。お前さんこの頃どうかしてるね、とねえさんに云われたことがあります。あたしただ笑つてたけれど、自分でも、どうかしてるような気がしていました。でも、お父さんの教えは、ちつとも忘れたことはありません。

せん。芸者をしてる以上は、男に惚れてはいけない、たとえ旦那にも、岡惚と名のつく人にも、惚れてはいけない、とそうお父さんは、くれぐれも仰言つたでしょう。おかしなお父さんだと、はじめは思いましたが、だんだんたつうちに、真実のことを云つて下さつたんだと、分つてきました。こう云つちやなんだけれど、お父さん、むかしは随分道楽なすつたんでしよう。だから、お父さんの仰言ふことは、通り一遍の理屈じゃなく、もとでのかかった、すっかり入れあげた、底まで見とおした、真実のことだと、あたしほんとうに感心しました。男という男は、みんな、うわべはいろいろだけれど、心底は同じものだ、あたしにも分つてきました。だからあたし、どんな人も、ほんとに好きにはならない

と、そう決心していました。村尾さんだつて、そうです。決して好きになつたわけじゃありません。ただ少し、気懸りにはなつていました……。。

それも、近い頃のことです。あの方のお母さんが亡くなられて、百ヶ日もたつてからだつたでしょう、急に、しげしげいらつしやるようになり、しまいには、いつづけなさることさえありました。「僕はどうせ、病気で死にかかつて、危く拾いものをした命だし、母親も見送つて、気にかかる者もないし、これからの生涯をどんなにぞんざいに使おうとかまわらない。実にさつぱりした気持だ。」

そうかと思うと、また――

「ねえ、千代ちゃん、もしもの時には一緒に死んでくれないか。」

君と一緒になら、僕はいつでも死ぬ用意をしてるよ。」

そんなのが、酒の上での他愛のない調子で、にこにこ笑っていらつしやるんだから、ちつとも張合がありませんでした。けれど、その裏に、何だか気になるものがありました。何だろうかと、あたしさんざん考えたあげく、お金のことらしいと思いました。以前は、お金がほしいとか、僕はとても貧乏だとか、そんなことをしきりに云っていらしたのが、ぷつぷつと、お金のことは口になさらないんです。それとなくさぐりをいれてみると、中江さんから少し用だてて貰ったとか、母の貯金が残っていたとか、ぼんやりした話でしたが、あたしには、まだそのほかに何かあるような気がしました。それに、何かにつけて、あたしと依田さんの仲

をしきりに気にしていられるようでした。依田さんとはあたし、初めから何でもなかったし、その頃はもうあまりお目にもかかっていなかったから、笑ってすましましたが、その依田さんと云うのが、実は、村尾さんの勤めていらるる会社の社長なんです。そうしたわけで、これは何か、会社の金に関係がありはすまいかと、そんな想像をして、心配になってきました。いくらこちらは商売でも、もしもあたしのためにそんなことでもあつたら、ほんとお気の毒です。けれど、その頃村尾さんは至つて鷹揚で、お出先の勘定もちゃんとなすつてるし、何かといつてはあたしにお小遣も下さるし、お盆の時なんか、まとまって助けてもらいました。

「こんなことを、僕からしていいかどうか分らないが、もしお差

支えがあつたら止めるし、そうでなかつたら、してあげよう。」

言葉は冗談の調子ですが、お客としての云い草じやないし、眼色がへんに真剣なんです。それをふと真にうけて、あたしは考えこんでしまいました。

「では、お願いしますわ。」

云うといっしよに、眼の中が熱くなつて、涙がいつぱい出てきました。場合がいけなかつたんでしょう。前の晩に二人とも酔いつぶれて、朝遅く眼をさまして、夢のような気持でぼんやり顔を見合つてた時でした。村尾さんはあたしの涙を見ると、いきなりあたしの手をとつて、お嬢さんか奥さんにでもするようにならうし、おらしくうなだれて仰言るんです。僕は君といっしよにならうとか、

君をすっかり自分のものにしようとか、そんなつもりでいるんじゃない。ただ、君にすっかり生きていてもらいたい。君はほんとの労働者だ。けれど、労働者としての矜りを持っていない。今の世に労働者はいちばん尊いものだから、それだけの矜りを持たなければいけない。その矜りを持つには、売らないことだ。働くのはいくら働いてもいい。けれど、売ってはいけない。働くことと売ることとはちがう。とそのようなことを、まじめに真剣に仰言るんでしよう。ふだんは無口なただけれど、そんな時にはひどくお饒舌になるのです。思いきって働くがいい、けれど売っちゃいけない。それだけが、君に対する僕の望みだ。とそうくり返し仰言るんです。それがへんに、あたしの胸を刺しました。あたしい

つのままにか泣きだして、村尾さんの腕にきつく抱かれています。息苦しくなつて、自分に返ると、何だか極りわるい気がしました。そんな気持になつたことは、近頃にはないことです。

そのようなことがあつたり、また何よりも、いちばん度々逢つてたものですから、あたしいつか しらず、村尾さんを頼りにするようになっていきました。といつても、心から好きになつたのとはちがいます。お父さんの教えは、りっぱに守つてるつもりでした。芸者をしている間は、どんな人でも、ほんとに好になつてはいけない、とそう決心していました。そして、やはり、いくらか我儘の出来る地位にはなつていましたけれど、前からの義理あいで、時には身体で稼ぐことも続けていました。それも、あたし

にとつては、働くことの一つでした。村尾さんとのそうしたこと
も、働くことの一つでした。ただ、働くのはよいが売ってはいけ
ない、というその区別が、何だか胸を刺すようでいて、それもは
つきり分りませんでした。それに、村尾さんばかり頼りにしてい
たのでは、お金の上的ことで、村尾さんが今にきつとお困りにな
る、只今でもどんな無理をなすつてるか分らないと、そうした心
配もあつて、村尾さんばかりを大事にするわけにもいきませんで
した。

それでもやはり、あたしの心ではなく、あたし全体が、村尾さ
んの方へよりかかつていつてるようでした。殊に、誰からかけ
ねらわれてることに気がついてからは、なおそうでした。つけね

らわれるといつても、ぼんやりしたことで、何にもはつきりしたものはつきとめられませんでした。初めは、夜遅くお座敷からの帰りなどに、その辺の電信柱の影や、看板の向うや、町の曲り角に、誰かがつつ立って、あたしの方をじつと見てるようなけはいだけでした。いつそんなことが気になりだしたか、自分でもよくは覚えてはいませんし、またあたしは、近眼に乱視なので、遠くがよくみえませんが、たしかに、物影からあたしの方をじつと見てる人があるんです。おやと思つて立止ると、もうその人の姿はありません。それにあたしは、そんな時はたいい酔つてたものですから、何かの気のせいだろうぐらいに思つていました。

それが、だんだんはつきりしてきましたし、しつっこくなつて

きました。家の近くを、夜遅く、変な人がうろついていた……家の横手で、変な人が立聞きしていた……そういう噂を、ちよいちよい聞くようになりました。また、夜中の一時二時頃、誰からもなく、あたしに電話がかかってきました。千代次さんはいますかと、きまつてそうなんです。いない時には、そうですかとだけで、切れてしまいますし、いる時にも、そうですかとだけで、切れてしまいます。どうも、お出先からの電話じゃありません。それが、女の声だったり、男の声だったりします。電話に出るのは、たいてい仕込さんですが、あとでは、あたしが待ちうけていて出てみましたが、そうですかとだけで切れてしまうので、ばからしくなりました。

そうしたことから、だんだん、あたしをつけねらつてゐる者があ
るといふことが、分つてきました。うちのねえさんは心配して、
心当りがあるかどうか、あたしにたずねましたが、全く覚えのな
いことでした。あたしこれまでに随分、いろんな男の人を知つて
はいましたが、どれもただ、稼ぎのためだけで、お父さんの教え
の通り、心を移したことはありませんし、したがつて、だました
とか、不実なまねをしたとか、とにかく、怨まれるような筋合の
ものは、一つもありませんでした。それがあたしの自慢だといつ
てもよいくらいでした。つけねられる人があろうなどは、て
んで心当りがありません。それなら何か不良のせいですよ、と箱
やさんは云いました。こんどわたしがとつつかまえて、袋叩きに

してやります……。そして箱やさんはあたしの出入りに気をくばってくれました。

そうして、ねえさんから心配されたり、箱やさんから気をくばられたりすると、かえってあたしは心細くなってきました。そうしたことから、しぜんと、村尾さんを頼りにするようになって、五六日お顔を見ないと、手紙をだしたり、また、逢えば逢えたで、引留めたくなったりするのです。村尾さんはいつも受身の方で、酔っぱらった時のほかは、自分から泊ってゆこうと云い出すようなことは、ほとんどありませんでしたから、いつもあたしの方がだだをこねることになって、時には無理なこともあったでしょうが、迷惑そうな顔をしながらも、実は嬉しがっていらっしやるの

が、あたしにはよく分っていました。そしてあたしたちの間は、急に深くなつていきました。ところが、ふしぎなことに、あたしは誰かにつけねらわれてることを、村尾さんに話しにくかつたんです。つけねらわれてるといっても、前のように云えば、毎晩のように聞えますが、実は五日に一度とか、七日に一度とかで、そう始終のことじゃありませんし、村尾さんと逢つてると、そんなことを気にするのが、ばからしくも思えるのでした。がそればかりでなく、もつと何か、話しにくいものがありました。お話してどう思われようと、あたしの方はかまいませんが、それが村尾さんの気持にどうひびくか、氣遣われてなりませんでした。

それというのも、その頃、村尾さんの様子が少し変だったせい

もあります。何だかこう冷たいよそよそしい態度をなすって、早く依田さんの世話になったらどうだとか、よい旦那を見つけたらどうだとか、僕がこれほど力を入れてやってるのにまだ売る気なのかなどと、それもただのやきもちとちがって、へんに冷く突き刺すように仰言るんです。あたしいい加減にあしらって、旦那なんか面倒くさくていやだの——それもあたしとしては本当のことだし、また、インチキな稼ぎ方なんかちつともしないと——それもあたしの気持からすれば本当のことだし、そんな風に答えますと、こんどは村尾さん、あたしの顔を見て、にこにこ笑っていらつしやるんでしよう。それも、ひとをばかにしたような、そのくせ可愛いといったような、そういう笑いかたなんです。そんな

のが実はあたしの性に合うので、いい気になってると、ふいに、考えこんでおしまいなさる。かと思うと、これからどこかへ飲みにいこう、大いに愉快にやろうと、そうなんです。そして酔っぱらうと、いやにつつかかかってきたり、また、何でもないので、何も云わないのに、じつと眼を据えて、涙をこぼしていらつしやる。わけをたずねると、いやに不機嫌で、怒っていらつしやるようなんです。

落付かない、いらいらした、今にも破裂しそうなものが、あたしにも伝わってきて、じりじりと、あぶない瀬戸際におしつめられてるような気持でした。そんなこと、あたしには初めてなんです。ほかの人はどうかしらと思つて、見廻してみると、一流のち

やんとしたねえさんで、旦那のほかにも三人の岡惚をもってるのがあったり、お酌あがりの娘さんで、ちよいちよい浮気してるのがあったり、自由な身でもないのに、一人のひとを守ってるのがあったり、さまざまでいて、そしてみんな、朗かに落付いてるようでした。こんなに困って苦しんでるのは、あたし一人なのかしら。そう思つて、ふとしたきっかけから、静葉さんにたずねてみました。以前はそうとう莫連をした人で、今では、島村さんという旦那とも岡惚ともつかない一人のひとを守つて、すっかり堅くなつて、そのために苦勞をしながらも、それがとても大っぴらで朗かで、ちよつと變つてるのでした。実はあたし、困つちやつたの……とそういう風にきりだしましたが、自分でもはつきりし

ないので、先がつかえて、みんな平気で浮気をしたりなんかして、あれでいいのかしらと、そんなことを云うと、静葉さん、それが当り前じゃないのと、一言で片付けてしまいました。そんなら、静葉ねえさんと島村さんとは……と云いだすと、静葉さんは急に、とてもこわい眼付をしました。

「何を云うのさ。あんたなんかに分つてたまるもんですか。」
ほんとに怒ってるんです。ひやかされたとも思つたんでしよう。あたし云い訳をしようとしたけれど、とっつきがありませんでした。その何でもないこと、静葉さんから怒られたということが、どうしたわけか、ひどくあたしの気持をうち挫いてしまいました。あとであたしは一人で、涙がでてきて仕方がありませんで

した。もと芳町のりっぱな芸者で、箱やさんといっしょになって、長年苦勞したあげく、爺さん婆さんになって、二人で仲よく乞食をしてあるいてるのだという、その人たちに出逢つて、あたし、五十錢銀貨をあげました。

そしてるところへ、或る朝、夜廻りの作さんが、あたしをそつと呼びだしました。昨晚おそく、この辺をうろついてた男がいた。前の通りや横町を、ゆつくりと往つたり来たりしていて、それが、あたしの家の前にさしかかると、立止るともなくちよつと足をゆるめて、家のなかの様子に注意をむけてる風だった。作さんは、その男とすれちがつてから、あとで何だか気になり、暫くして戻つてきてみると、やっぱりそうなので、ふと耳にはさんだあたし

の話を思いだし、こいつかなと思つたのでした。黒いマントをすつぽりときて、黒い帽子をふかくかぶつて、それほど寒くもないのに、襟巻で頬をつつんでるんだそうです。この野郎と、つかまえるつもりで、作さんが向つていくと、先方では早くも気がついて、つと横町へ切れこんだかと思ふまに、歩いてるのか駆けだしてるのか、足音もさせないで、それが風のような早さで、消えてなくなつてしまつたのでした。だけど、あわてたとみえて、ハンカチを落していった。もし心当りの人でもあるといけないから、ないしよで知らせるんだといつて、作さんは、使いふるした皺くちゃなハンカチを差出しました。ふつうの安物のハンカチで、そんなものに見覚えのあろう筈はなく、またこのひょうきん剽ひょうきん軽な年より

の作さんが、何を云うことやら、あたしはよくも尋ねないで、ただお礼をいって、当分ないしよにしといて頂戴とたのんで、少しばかり心附をやりました。

それが、朝のうちは何でもなかつたが、おひるからさむざむと空が曇って、夕方になると、へんに気になりだし、泣きたいような心持になって、ついふらふらと、村尾さんに速達の葉書をだしてしまいました。そして安心してると、九時頃、喜久本からかかってきました。村尾さんです。

あたし、とても淋しいような、また浮々とした気持で、急いでいきますと、村尾さんはどこで飲んできたのか、もうだいぶ酔ってるじゃありませんか。それでいて、きちんと坐って、片手で火

鉢のふちをさすりながら、何の話かって、いきなりそうなんでしょう。ただ、お逢いしたかったの、と笑ってみせましたが、あたしもぐいぐい飲んでやりました。何のために速達なんかで呼びだしたのか、自分でも分らなかつた上に、村尾さんの痩せた蒼白い頬が、きつく引緊つて、冷い眼があたしを見据えてるんです。すり寄つて、甘つたれてやりましたけれど、村尾さんは姿勢をくずしません。あたしの指先をいじりながら、君とももう別れなければならぬかも知れないけれど、しっかりしていつておくれ、それが僕の頼みだと、いやにまじめなんでしょう。それがどうも調子っぱずれなので、あたしは微笑んで、やたらにいやいやをしてみると、ふいに、村尾さんの眼から、涙が流れだしました。ふだん

のまんまの顔付で、涙がはらはらと出てくるんです。それをあたし、またかと思つて、ハンカチで拭いてやりましたが、村尾さんは初めて自分の涙に気がついたように、身を引いて、袂をさぐつています。ハンカチがありません。あたしのハンカチをとつて、眼をふいて、もう笑つていました。あたしは、その時はつとしました。作さんが拾つたというハンカチのことを思いだしたんです。そのつまらないきっかけから、いやにまじめなものが頭のおくに眼をさましてきて、何やかやくわしく知りたくなりました。家のこと、女中さんのこと、会社のこと、お友達のこと、そして何よりもお金のこと……。だけでもう村尾さんは、何にも興味がなさそうに、あたしの云うことなんか耳にもとめずに、小唄をくちず

さんだりして、投げやりな浮いた眼付をしているんです。僕もこれで、無理なこともしてきたし、さんざん苦勞もしたし、一人前の男になったものだど、ひとごとのように云うんです。あたし何だかなさけなくなつて、やたらに酒をのんでやりました。

そうしたところへ、電話でした。もう十一時半頃でしたでしょうか。日頃ひいきになつてゐるかたのお座敷だったので、何の気もなく受けて、戻つてくると、村尾さんはしらけた顔で、笑いながら神経質に、お座敷だろうから帰るよと、すぐに立上ろうとなさるんです。あたしはなおなさけなくなつて、ほんとに涙ぐんで、さんざんだだをこねてやりました。今晚はどうしたつて帰さない、ちよつとで貰えるお座敷だから、待つていて下さらなけりや承知

しない、たつて帰ると仰言るなら、断ってしまつて側についてる、とそんなことを云つてるうちに、村尾さんの、ぞつとするほど冷たい眼にぶつつかりました。あたしにはよく分つています。断るなら初めから断つたらいいと、そういう意味でしようが、あたしにしてみれば、夜遅く、中貰いに一寸でもというお座敷へは、顔を出しておかないと、肩身がせまいというわけもあつて……そんなことを考えていると、もう芸者も嫌だし、世の中も嫌だと、投げやりな気持になつて、村尾さんをむりに引止める力もなくなりました。そして酔つたふりをして、半分はほんとに酔つて、つつぶしながら、村尾さんのあぶなつかしい足音をぼんやり聞きながりました。

それでも、きつとまた戻っていらつしやるにちがいない、と心待ちにして、立上りもしないでいると、おのぶさんがやって来て、けんかでもしたの、と心配そうにきくんです。あたしうるさくなつたから、村尾さんはまた戻っていらつしやる筈だから、きつと引止めて、すぐに電話を下さい、とそう頼んで、ほかへ廻りました。賑かな、ばか騒ぎがすきなかたです。お酌さんを交えて三四人で、騒いでいましたが、やつぱり心が沈みがちで、村尾さんのことが気になって仕方ありませんでした。いくら飲んでも、頭のしんからさめていきます。一時すぎになつて、喜久本に電話してみると、村尾さんはいらつしやらないとのこと。なお気になつて、そのままもらつて、外に出ましたが、足もとがふらついている

のに、頭のしんがさえて、震えあがるような寒けがしました。そしてどこへ行つていいか分らないような気持になつて、いつのまにか泣きだして、家の近くをぼんやり歩いていました。そうしたことにふと気がついて、ばかばかと自分に云いながら、よその家の戸口によりかかつて、溜息をついて、なんて自分はばかなんだろう、こんなでどうなるんだろうと、心の中でくり返していますと……向うから、せのひよろりとした男が、黒いマントを引きずるように着て、黒い帽子をかぶつて、黒い襟巻で頬をつつんで、薄暗い通りに眼をじつと据えて……どうも、村尾さんらしいんです。あたし、いちどに息をつめ、近眼の眼をみはり、じつと待ち受けて、側まで来ると、つかつかと出ていってやりましたが、村

尾さんと眼を見合つたとたん、気が遠くなりました。何か声かして、それからしいんとなつて、どれくらい時間がたつたか……やがて、がやがやした人声が目についたので、眼をあいてみると、あたしはそこに一人しやがみこんでいて、向うから、芸者衆が四五人、お客さんを取りまいて、だらしなく酔っぱらつてやつてきます。あたしはむちゆうで馳けだして、家の戸を引きあけて、とびこんでいきました。

まだ起きて待つてた松若さんが、すつとんきような声を立てました。あたしの様子がよくぽどへんだつたにちがいありません。ただどあたしはもう、そんなことにとんちやくなく、二階の室にかけあがつて、ふとんの上にきちんと坐つて、物に憑かれたよう

な気持ちで、じつとしていました。お座敷着のままふとんのまんなかに坐ってるあたしが、こわかったのでしょう、松若さんがそつとのぞきに来て、またおりていったのを、ぼんやり覚えています。

それから暫くして、あたしはとびあがって、窓を引開けました。たしかに、村尾さんが外に来ています……。村尾さん、みんなあの人だったんです。お座敷では、しっかりした冷淡なほどの素振をしながら、一人で、あたしの家の前をうろついていたんです。全く別々なその二人が、じつは一人だったんです。まだ、誰に遠慮もなく逢えるのに、どうしてそう二人になるんでしょう。嫉妬……真心……恋……ばかりでもない。あたしが何もかもうつちやって進んでいかなかったのが悪かったのかしら。そんなわけはな

い。そんなら、なぜ向うからもそうして下さらなかつたのかしら。あたしが芸者なんかしてるのがいけないのかしら。それでも、あたしだって……。窓からすかしてみると、表の通りは、しいんと薄暗くて、向うになんだか、村尾さんが……。やっぱりそうなんだ。あたし心の底から、びっくりしてしまつて、のりだしてよく見ようとすると、とたんに、窓枠の木が外れて、身体が宙にとんでしまいました。強い声で叫んだと思います。頭がめちなやな大きなものにゆすぶられて、まっくらになりました……。

二階から落ちて、玄関の植込の影の捨石に頭をぶつつけた千代次は、昏倒したまま病院にかつきこまれたが、脳の内出血で、手

当の仕様もなく死んでいった。

その三十五日忌の品物が、村尾庄司の家に贈り届けられた時、村尾は包みを開こうともせず、庭にとびだして、冬の冷い朝日のなかで、大きく深呼吸をした。骨だった彼の眉間には、深い決心の色が現われていたが、それがどんな種類のもんだか、今は知る由もない。それに第一、人の決心などというものは、実践に移されない限り無意味なものだから、ここで吟味することをやめよう。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄著作集 第三卷（小説3 [#「3」はローマ数字、1-13-23]）」未来社

1966（昭和41）年8月10日第1刷発行

初出：「文学界」

1934（昭和9）年1月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2008年3月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

千代次の驚き

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>